



岡野雄一さんの漫画『ペコロスの母に会いに行く』は、認知症の母親と 60 代の漫画家の息子の交流を描いた作品です。ペコロスとは西洋たまねぎのことですが、見事にはげあがった岡野さん自身が自分のことを呼ぶ芸名です。『ペコロスの母』シリーズは、老親の介護の日常をほのぼのとした長崎弁でユーモラスに描いた作品です。

岡野さんの母親、みつえさんは大正 12 年に熊本県天草に 10 人きょうだいの長女として生まれ、長崎のご主人のもとに嫁ぎました。酒癖の悪いご主人が亡くなった後は認知症と脳梗塞の診断を受けられます。漫画にはみつえさんの認知症の進行、自宅住まいからホームへの入所、たびたびの見舞いの様子などが描かれています。車いす頼みの移動になり、ホームの入所者や職員と楽しく過ごされた後、みつえさんは 91 歳で亡くなりました。その後も漫画にはみつえさんの思い出が描かれています。

みつえさんは目の前にいる岡野さんに「あんた誰？」といい、もの盗られ妄想が起こってわめき散らしますが、そうかと思えば「ゆーいち、どこ行っとった？」と聞きたずね、「さっき父ちゃんが訪ねて来なったばい」と亡くなったご主人が傍にいたと言い出します。一瞬の日差しのように意識が明晰になることもあり、「うちがボケたけん父ちゃんが現れたとなら、ボケるとも悪か事ばかりじゃなかかもしれん」とつぶやきます。母親らしくお説教をすることもあります。

認知症者のケアをする家族は、患者の言うことなすこと、一挙手一投足に翻弄されて大変な思いをするものです。岡野さんも認知症の母親にふりまわされることを負担に感じなかったはずはないと考えますが、その言動も含めて愛すべき母親のありのままの姿と受け止め、ふりまわされることを楽しんでいるようです。みつえさんの自由さに憧れている雰囲気さえもあります。「母ちゃんは良かことも悪かこともどんどん忘れてどんどん身軽になって

いく」。

みつえさんの意識は、娘時代、嫁いだ頃、息子の子育て期、夫の生前など、様々な時期にタイムスリップします。細切れの時間が生起して、亡くなったはずの人が目の前に現れ、様々なエピソード記憶が夢のようにとりとめもなく再現されます。ベッドで目を覚ましたみつえさんは我に返り「遠くまで、うーんと遠くまで、眠っとった」と言います。

みつえさんは赤ちゃんをおんぶして、あやす動作をします。赤ちゃんは実際には何年も前に亡くなった息子です。亡くなった人のお葬式などを記憶している家族からすれば、気持ちの悪い場面かもしれません。しかし背負った赤ちゃんに愛情を注ぎ、喜びを感じているのは、みつえさんの「今・ここ」の現実です。

介護施設のベッドの中で、みつえさんが布団のはしをつまんで針仕事の動作を繰り返す場面があります。周りの人には糸も針も見えませんが、大切な家族のために服のほつれを縫っている、その感情もまたみつえさんにとって、「今・ここ」の現実なのです。

私たちは、時間は過去から現在、未来へと一直線に流れるものと考えていますが、認知症者の生きる時間は現在と過去が混在しており、その脈絡は絶えず揺れ動き、一部が書き換えられたかと思えば、また元に戻るような動きを繰り返します。

時間だけでなく空間もまた、三次元的なつながりを失って、一部は記憶の中の別の空間につながってしまったり、また元に戻ったりします。

認知症者が生きているのは他者と共有できる時間・空間の経験世界だけではありません。当人の記憶が強く作用して、「かつて・あそこ」の経験が「今・ここ」で経験されているのです。それが当人にとっては事実なのです。

認知症者の経験する時間・空間の揺れ動きに、介護者は巻き込まれ、振り回されます。介護者は、認知症者の生きる世界を否定し、何もさせないようにすることがあります。予測できない言動を防ぐためにはそれが一番簡単です。「あなたは糸も針も持っていない。もう縫い物なんてしなくていい」と言ってしまうなら、それはきっとみつえさんが生きて経験している世界を否定してしまうことになるように思うのです。健常であること、意識が清明である状態だけがまっとうな人間のあり方なのでしょうか。

対人援助の研究手法のひとつに「現象学的記述」というものがあります。起こっている出来事を、行為者や当事者の経験のとおり記述し、理解しようとするものです。

『ペコロスの母』シリーズは認知症者の経験世界の現象学的記述であり、介護者（あるいは死者を悼む人）の現象学的記述でもあるように感じました。岡野さんの思い入れや解釈

も交えられていますが、みつえさんの経験世界の中に浸りこもうとされたから描けた作品であると思います。

車椅子に乗る認知症のみつえさんが、乳母車に乗る赤ちゃんと出会い、握手をする場面があります。人生の重荷を降ろした笑顔と人生の重荷をまだ知らない笑顔がすれ違います。

「お久しぶり」と声をかけてきた老婦人とみつえさんがひとしきり談笑していると、老婦人の息子夫婦が「母さん、探したばい！！」と声をかけてきます。「こうしてよく知らん人に話しかけるとです」と謝られます。岡野さんが「知らん人やったと？」と驚いていると、立ち去り際にその息子夫婦から「でも、こげん楽しそうに笑うとるとは久しぶりなんですよ。ずっとウツだったので」「本当にありがとうございました」と感謝の声をかけられます。

健常者の生きる世界も、本当はこんな風に偶然性でつながり、互いに助けるともなく助け合って成立しているのかもしれませんが。認知症者と介助者といった枠を離れて、対等の存在として向き合うことの大切さが示されているように思えてきます。